天保山名所図

ル 4
3766
2

門ル4
流3766
巻2
早稲田大学図書館
昭25.11.14
除籍

昇平橋

天保山の南麓にあり。海岸に流せる橋にして熱くるとりて造る美人茶屋は橋あり。此川とい宗廣院より流れて西亀甲橋を潜くに入りと廻りて橋下と通じ海に入る

内川乃あまとどり

葛城は神もあはれと思ふらん流れ花ぐさうけて目おろす浦の石橋　東雲堂

中ゆるがひび擲きて流るゝ人もあり治まる御代の堅さ石び　金土師女

此橋は海岸の石垣に打流せ石橋ふりて橋柱の本まで流れ打ち寄せ青苔滑に石と纏ひ其景色いと雅にして當地一箇の奇観なり肥後長崎の地にあり石橋と造るは其外海内に於て海岸に石橋とかゝる事と聞ば越前國福井の橋は長さ百余間にして半は木を以て造り半は石を以て作る是まで一奇なり。又京洛三条五条に両橋は石を以て柱を作り固と云昔役小角葛城嶮より吉野の金峯御嶺の間に岩と以て橋を造りて通ひ路とせんと思ひ葛城の明神一言主の神に其事をうらさせと跳ゝ明神うれひ歎けども返事なんとは。俄く大なる石を運びて橋と作る様なれば是は其形の見ぐるしきとて夜ゝ流さんと云へれば小角奏ありて咒を以て神を縛りて捕ふ。むとぞさるを縛の一言主は流れもたてざるよりて。茶屋の橋は中絶くるまで憲の奇に美く称合せり

舜平橋

字彙云
聚石爲步
渡水曰矼
又曰以木
渡彴杠
石彴矼

拾遺

岩は此夜の契りも始ねばこゝ明るまでゝ〜れかづ〜き此神

勢多まゝ此説信用し〜げと」按ず廣博物志ず三齋要畧を

載て秦始皇石橋を作つく海を過て日の出る処を観と」

海神をして石橋を架さしむる此説蓋城乃岩

橋ず相似たり巧〜くい後人役小角が靈異を傍る附會の

妄説なるべ一言主命い素戔烏尊の御子なるり小角い佛

道のみを〜び神道を崇む蓋然至者此行者いなぞる歟

変ひ〜ん哉さんば日本ず於て石橋を架るず何の御字な

ばまるるか詳なるべ震旦ない秦始皇より始るといへと

土橋

羅平橋のあ上ず ひり其名定りるしば丸木と ゆく造り 橋上ず

ちとつを九夜の徳ずい芝と 樋中央ず人を除る此余りとのふく。

世俗ず馬ずけるどいるものゝ〜ごと〜

古老云浪華の市街立壹堺の川筋ず渡せる立壹橋といへる

ひり世俗ず橋を土橋と号ひ是も昔い在ず記する如きの石橋

あり〜と古地誌畧ず洩ひ今此ごとく造て更め〜と伝へ

今其跡とんとなり

和州吉野の山中ず柴橋といへるひり是い松の丸木を以て両岸

ず架こと生ず藤を以て柴を編是を載て橋とん左右の

縁ずい竹を以て松の小枝を結つけ欄の意とす甚雅なる

製作する。又紙中四五寸の葉岩倉川のよな大橋五千長
さ凡百世丈柱をく藻葉とゝ桁〻甚よる板と數て架せり。
同國魚津郡黒部川なる相模橋といへるいとさ凡二十六丈其
巾桟よ似く桟よりゝ俗これを刎橋と称ふとぞ

入江

山の東麓よりゝ岸ハおの〻石垣と成て横よ又石段と
なりて舟の着場とせり

柳川入江ハ凡山の正面すて山の形も他よりて一ハ絶景と
水上ハ来廣橋より流れ入西亀甲橋と成て此よ入太橋と唱く
羅車橋よ出る内川の入江れば越真の舟と成くてよ往来て

表の日ハ永きと見へ比。秋の夕ハ淋しきもまた〻で。糸竹の声
らべよ時とゝ月て。家よ帰るとゝ成るべし

釋名江公也小水流入其中所公共也くゝ之大者皆曰江云〻

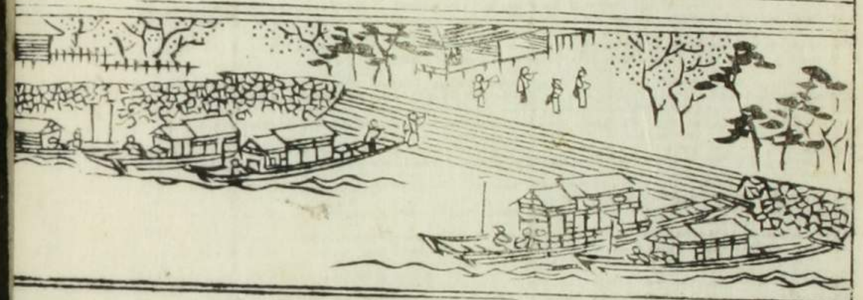
磯邊茶店

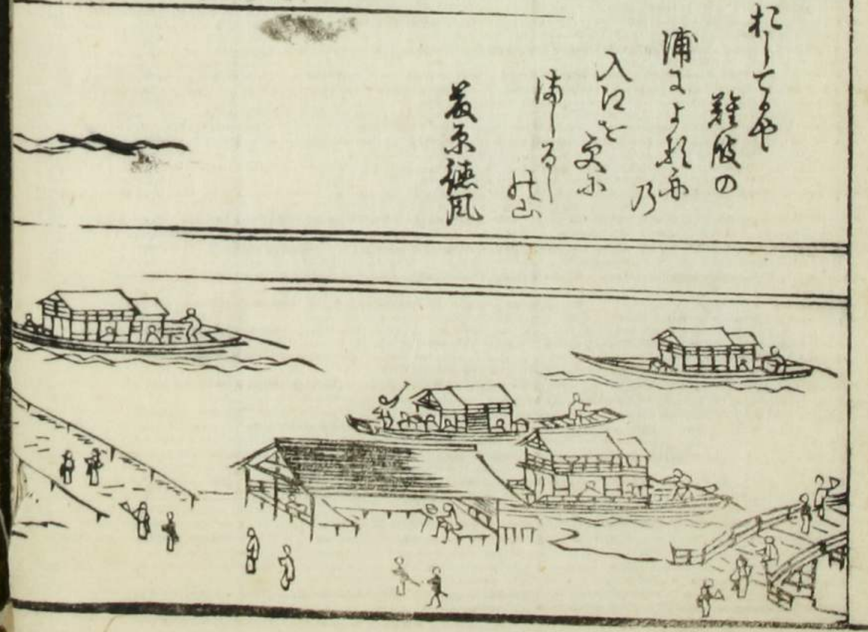
山の西麓の岸よ流く。蔭茶屋とゆて立ならせ。茶店数多
つゝる。此所不風景よく泛者の徘徊自由なり

此所ハ海〻る陰海を見ゝ。おくゝ平あ波洛の岩る山よて。
明石の瀬戸をはじめ。和田ゞ岬遠矢の濱。摩耶六甲山ホの高
嶺の風景近くハ尼ゞ崎嗚尾の浦より。西浪花ハの浦ゞ〻さと
成るゞ〻眺めやる比勝地なり

鹿の入江

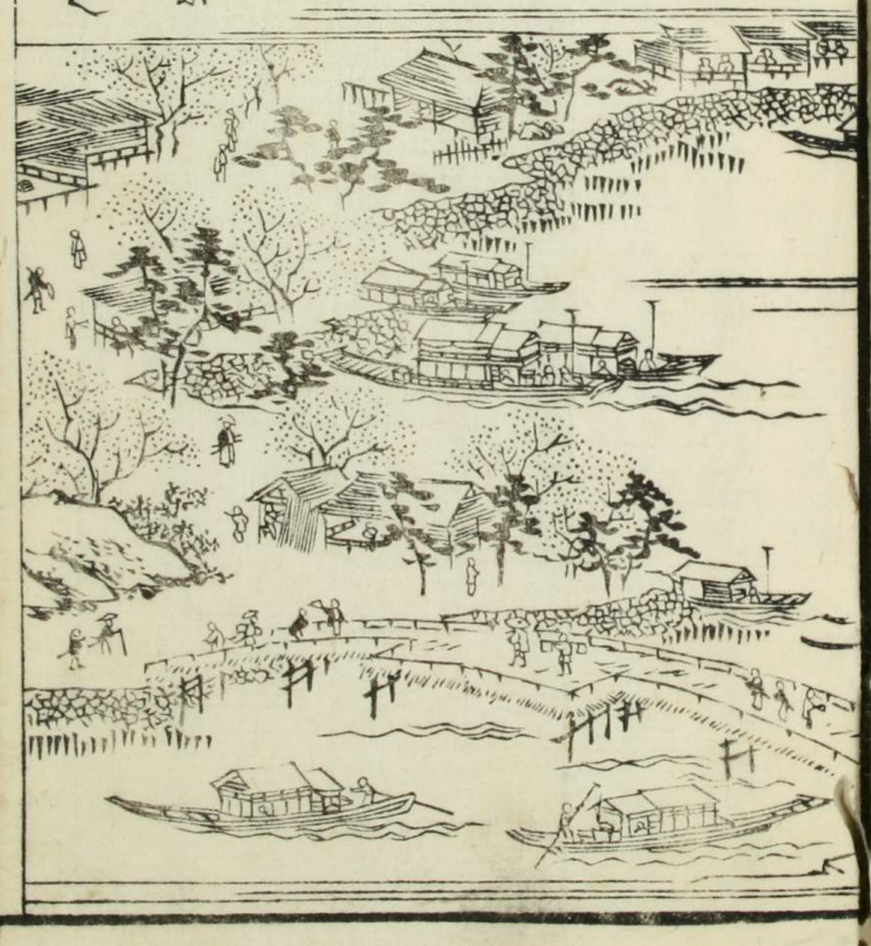
此入江は天保山の東南ふーとく丸此と山乃正面とあれども名き風景も佳こへくうされば樋爪の樓舟此岸ゑこぐよせ所せくまぐ鶯つどい陸ゑより山ゑ登り酒と





れーてる
難波の
浦ゑよれ乃
入江と文ふ
海ーる
義系徳風

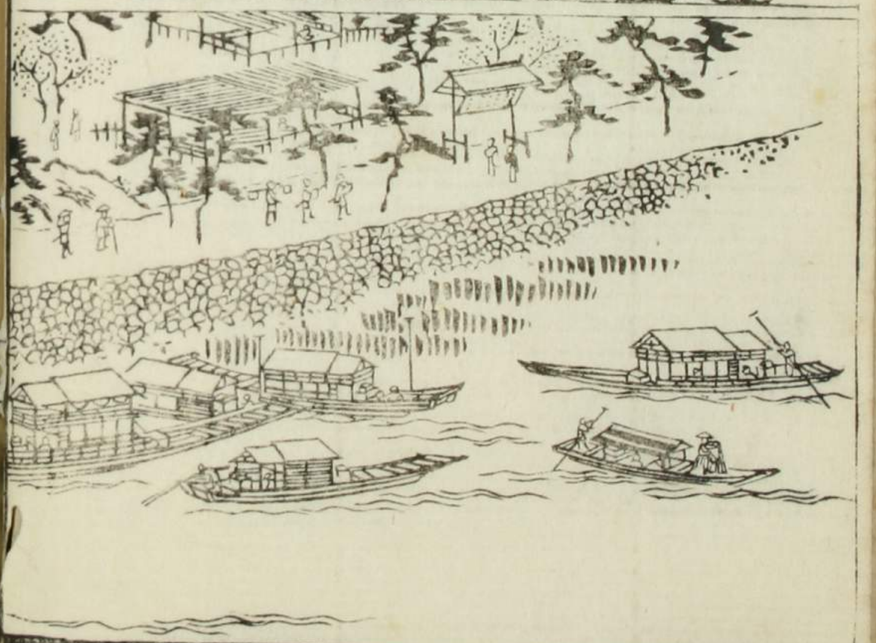
奥ゑ漕ぐ漁ふ
行り舟あり舟ゑ
行りて琴三絃と
きーぶる行りて山川
ゑりふ行舟の声
糸竹の音洋と
しーとる代の路も
延べて行りさま
ひとへりー流する
豊國の戸ざーぬ
御代の恩沢げふ
ゑーぐーる



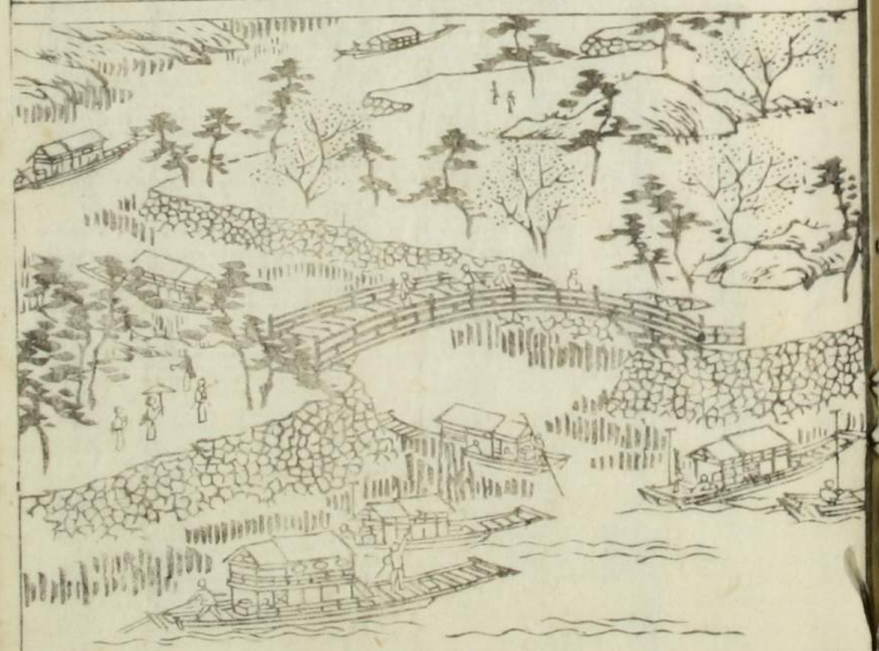
或人曰此茶店の座敷にはなを挿さるゝに須ゝの笑屋は板ひと
月のれとてやまびこるゝ人多ど古哥の心はいかゝれてうまふりた
巧と言ぜーよりも猶さて。俗さるも一は風流なり。且須ゝのうゝみ
濱松と磯別荘と号くるを思へば此茶店の名とも磯別茶屋と
唱ふべ可るゝ人々と。賞せられもおりーヒ
松風や村雨ものぐ磯別茶や行平湯さけや煮つゝん
此所より南の沖中又立てる棒杭なり。是不得因史なるべ
古哥ふも考く流出せる。濱花屋の澪標とのへるゝ是なり。則ち
水尾木。水尾串なり。俗よ棒木ともいへ

閑因ふ云澪標は水尾串なり。つゝ助なるれば水と濁べうゝ
つゝと言べし。と家ことろよ是の古は水尾木は数各十本
ばりく沖の方と第一番ゝ夫より次第に水上へ立みて二三と
つゝけと其間と隔つゝる凡百弱余り其木の長さ六尋ふ
除まり。あれども半は水ふ入且海上の廣ふるゝ為へふ甫ばり
有んと見へば却又一番の西とさて一の洲と云へり。行家後
頼ふれ古哥ふも一の洲と称ぜーばりけ西の水尾木は他ふ異
ようてよゝ標の木なり其形蘇魚の尾ふ似られば俗それと誘
の尾と云へつ是を浪花弁一の名物なり此澪標の事を類聚

末廣橋



和漢三才圖會云
橋音翹 和名波之
橋ハ水梁也
原始云
堯時作橋
濟瀆川以
便往來



國史延喜式土佐日記源氏物語其余代々の和哥集ホを
專ら出せり是ホを集めて別に印刻し。藤の家ホ萩が雅
左ホおのを鶯園ゞる澪標の古木の製作る雅器ホ添て進ず
また此ホ累せり雲やうく園しるべ

末廣橋

天保山の北にあり内川の第一番の橋なり。ちなより
舟を入て山下の入口にあり
内川ホ舟さし入る要ちく廣の名す　京師　東廣の本し　百橋堂
抑此橋ハ遊廓の舟くと内川へさし入る第一の橋なり。流れ
此ホ分るゝ所なれバ水勢つよく舟ホ起へらされバ此橋ハ
柱ホ用ひずして架渡せり是も此地の一奇といふべし海内ホ放て
橋杭ホ用ひざる橋ハ防州岩國の錦帶橋のミ余ホ有るのミと聞
及ビ浪華の市街大川筋より東堀ホ多くあるホ最所也と
いふべし此橋先年橋杭ホ用ひず架らしたゞ近年破損ホ及
ビ終ホ柱ホ立て是ホ修繕ひ情むべきなり

萬年橋

天保山の東ホ沿り浪華より此地ホ通ふ第一の橋也。
此橋をとり亀甲橋ともいふ先年通りとさぐ所
歳ホ代ホ従ひ年ホてかけちくもかとさ君ゞ家代の匠　肢男　金水
此橋造ホハ松樣左右ホ列りて其中ホ通行の人ホ見やすひの

花ざかりなれば。雲とこれば雪とちり。磯うち浪よせひつれて。
浦漕舟は香を送り松ハ風は琴を奏し。
くゝて茅葺ゐの色ちよ碧るハ自ら千代万代と祝ひるゐ

雨舎

茅葺楼の南にあり。長さ凡十二間余横凡二間余二階造りなる楼ゐり楼上よりの四方ハ眺望つゐく絶景なり
公の役夫順見の節こゝに雨を避ぎ為に造りかけ
故かく号くるなり

此雨舎の内に巨船の檣と三本立てり此柱の本に大ひなる
穴と穿ち所謂大佛柱のごとくに仕立り諸人是をくぐりつゝく
一具とし凡柱三丈余ありて凡檣の長さハ舟の長さと相等しく

りけと云へり

京都大佛殿の柱の数九十二本四間と隔て是と立る柱の
径五尺八寸ありと云ども去る寛政十年雷火の為に
焼失して横べ〳〵今僅に礎のみ存せり手初る凡周囲拾
伴に都に奪り大佛殿の柱とくゞる其中に取りて小原より
見へざりと成長の後やうやされしと今此雨舎の柱とする
よつけ昔と思ひ出されそゝろに紙くさとうろ色に傳る尤此雨舎
の柱ハ大佛殿に比ぶまゝ雲泥の相違といへども其類ひ
似くるとなくに思ひ合するのみ

雨舎

雨舎の内あるを
泥速三郷寺中
又八諸職法者人
諸仲間諸換の
組とよりこれ乃
築き石垣の
間数ひろい
並木の松
楊もど
柳加茂と
あり

きまり立れと
聴屋よりたのもと
かけるべくり
其あるまぬ
ひくとうも
諸社の西馬堂
彷彿とり

榮橋

万年橋の下より流れ出る此川の東堤より巽の方へ引かれば風垂川の
塘より流るる此川の黄橋の本は最東にあり。秋の比いおのく紅葉
して日に映じ川面にうつる光景絶妙の状を考じと見る

君が代はいや代に八千代に榮橋掛けてわたる世々の國民　星社花成

百紅のみつぐ秋とかうつ雁はの栄と橋の名を和せりん　柱律師宗順

夫橋は日本紀云仁德天皇十四年十二月橋を猪甘津に渡る則ち
甚處と歸て小橋と曰是始也ト　則ち此猪甘津とは浪速
は東に小橋村とて有是より東にはるかに百濟川とて流
れ出る。
流れを西に見て架し橋を世俗猪の橋と号く正しく古語
家集
思ひ出れど人はそれぞと神津の浦にうち初て　小野小町

龜甲橋

東廣北下流三條に分り東の川に架せる橋を龜甲橋と
号し西の川に架せる橋を西龜甲橋と号く去橋こゆる
造りなく他橋に異なり
諸人も茅代うけて渡るに此橋に龜の名付　古語集注

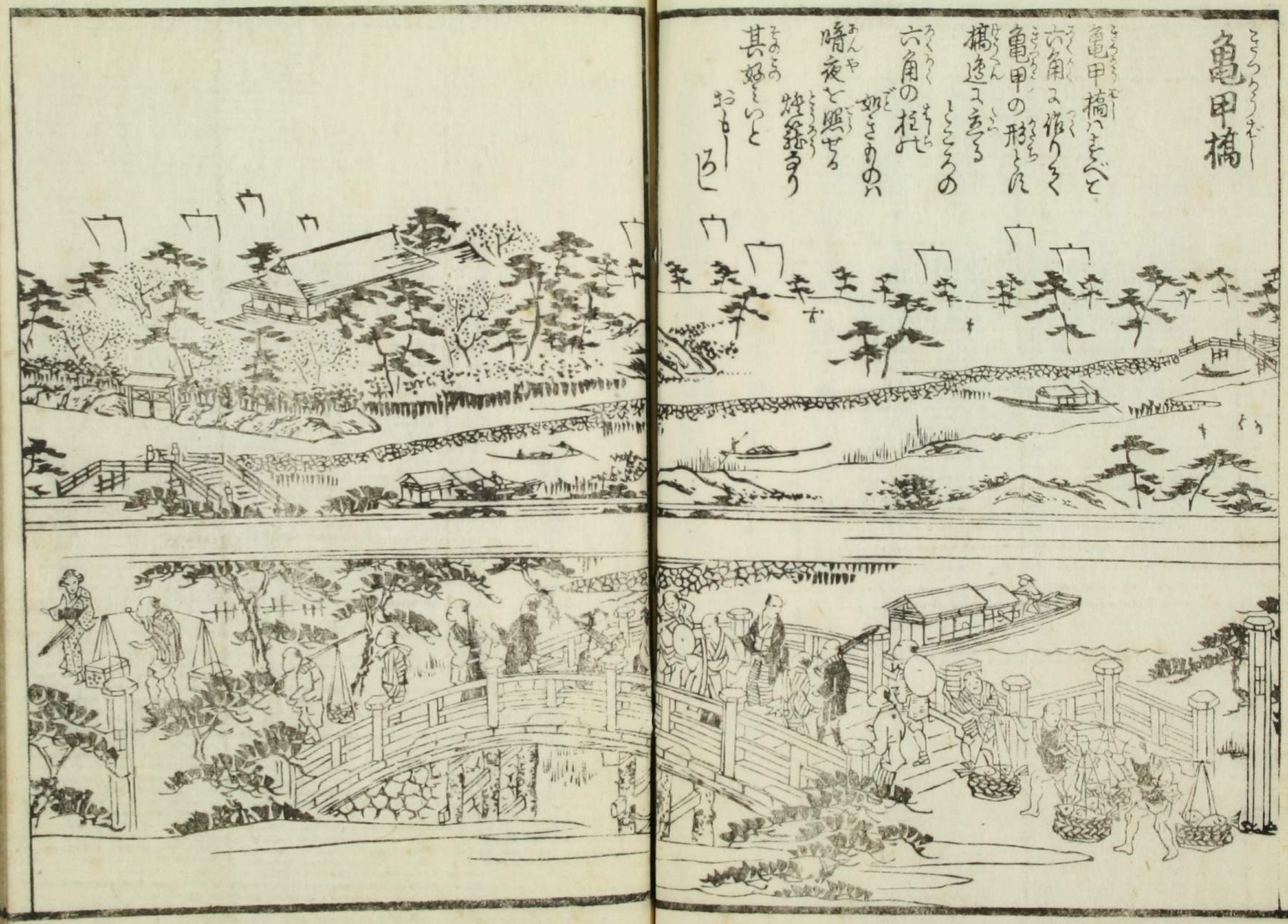
此橋は東西に両橋ありふ其作造六角にして龜甲の形に表
橋柱欄干は石に及ぶ橋を渡る道標の燈籠は
本と好く六角に作りて
抑龜は其性靈にして壽く甲長三百六十の内にして神龜を
りけるに見るが長くうとぐ九甲は甲にてよく外縫と防ぐの
軍にまとりて拔廊まで出せりされば補正成其子孫と敬祇

の壁書あり。亀六の術と云ふべしと書り。則ち此亀六乃術と云ふは昔釋尊在世の時節一人の学者ありて年七十にして学のぶとゝくども正覚に至ることを得ざるより天を仰ぎ地に伏して道を求めんと願ひ修行を遂ひて道を求ふまゝ釋尊これを憐ひ或る所に彼が草庵に立ち寄りて暫くく憩を示しまつる草庵の傍りに一の亀先来りて庭前に甲を乾せり池に水中より一疋の水獺あり。これ出て亀を噛んとす亀たちまち首尾四脚の内に縮め甲中に蔵まる。水獺これを噛んと術なくして其後

て水中に入水獺ゝ亀首尾四脚を出し赤来て赤蔵る。斯まゝの百度に及べども かくまて出ざれば水獺も術つきて後者て出ざりしと学者つくゝ見て釋尊に語りて曰く斯る甲出て亀ぐふも身を助くるに甲を着せりと頻りに感歎しまつる。

ゝ釋尊の宣く世に学道を求むる者亦此のごとく根を断て恣に顕し外魔怨敵と招くが故に修行身を滅ぶに至ることを一偈を以て示しまつる

藏六如龜　防意如城
慧与魔戰　勝則無患



亀甲橋

亀甲橋はまべと
六角に作りて
亀甲の形とた
橋造に立る
ところの
六角の柱は
如さまの八
隅夜と照せる
燈籠なり
其好いと
おもし

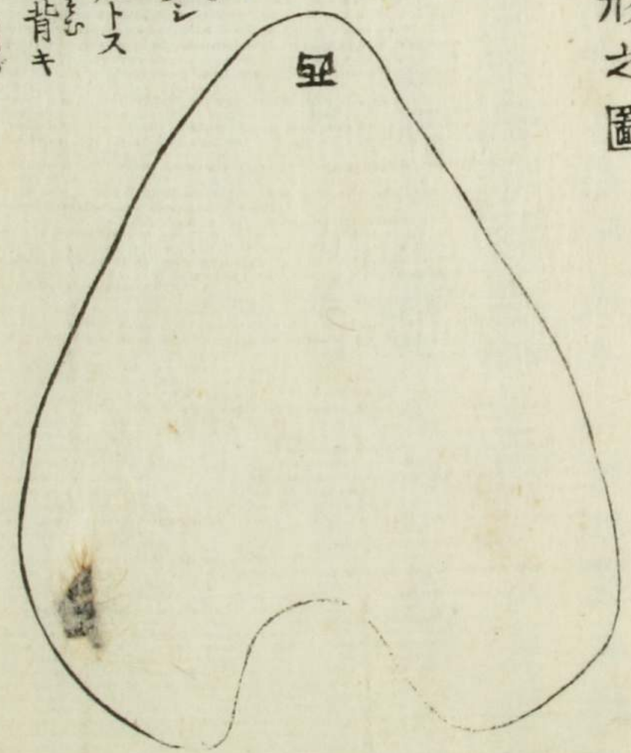
斯一偈の示しを仰ぎ学ん人たちまち省悟し道をのこりなく正
覚を至りしとぞ
是佛説の教示のごとし。世人何ぞ此のごく六根六情を行い
まゝに[区]其分限を過ることを思わず家を失い身を滅ぼすに
のれる。能亀の術をまのりて道を失うべしと教ひ下を
いうれを家業とたげを高くすく其楽しを楽とせば何
きを恵ひとなる日いうんや思ひめぐらしべきなることを
古人よく慈しとの雅俗を乗しくこれ亀甲也
附云天保山の地形亀甲の形のごと左は図を以て是を考へ

天保山地形之説

夫浪華表示天保山の成る事有難き御代の深き恵ホしを
諸国蒙船は通路を連ねる石色ゝ高津新観の勝地
と称り民の竈は旅ひと繁しく繁昌ることを仰ぎ
て也ありあり扨亦一奇の説と言へ遠近は雅客はよ
極び風景を稱賛し詩を賦し奇と吟ずるに遊業乃仙
境を比とるのれ許まあと爾いうまど其他意を於て強
何の縁由を接ると言るまへ呉の陽景を楽しやると歓び彼
仙境を比せる而已時を近頃此山の地形を穿鑿し詳らを

量て知る人いなく僕も伝へ聞く抑天保山の地形いかさま亀
甲に形を彷彿うと実や聞傳ふ蓬ヶ島の亀は甲に頂けるが
ゆゑに亀山とも称するは將此一條を随ひて彼を思ひ是を考る
ふ此地前は海にして亀を懐る縁由もとこゝに美しされば衆人お
のづから蓬莱山を比しくるも今く天より人をして言しむる
ものなるべし何はまれ吉祥の一箇の奇談と謂つべしかるが
故に左に金体の地形を図し并合の説を挙げ霊亀の祥
瑞蓬莱の故実等を輯録し天保山の所謂幸朝は蓬莱
山も称すべき俗しと世り図しく自然の理を考へうし

天保山地形之図



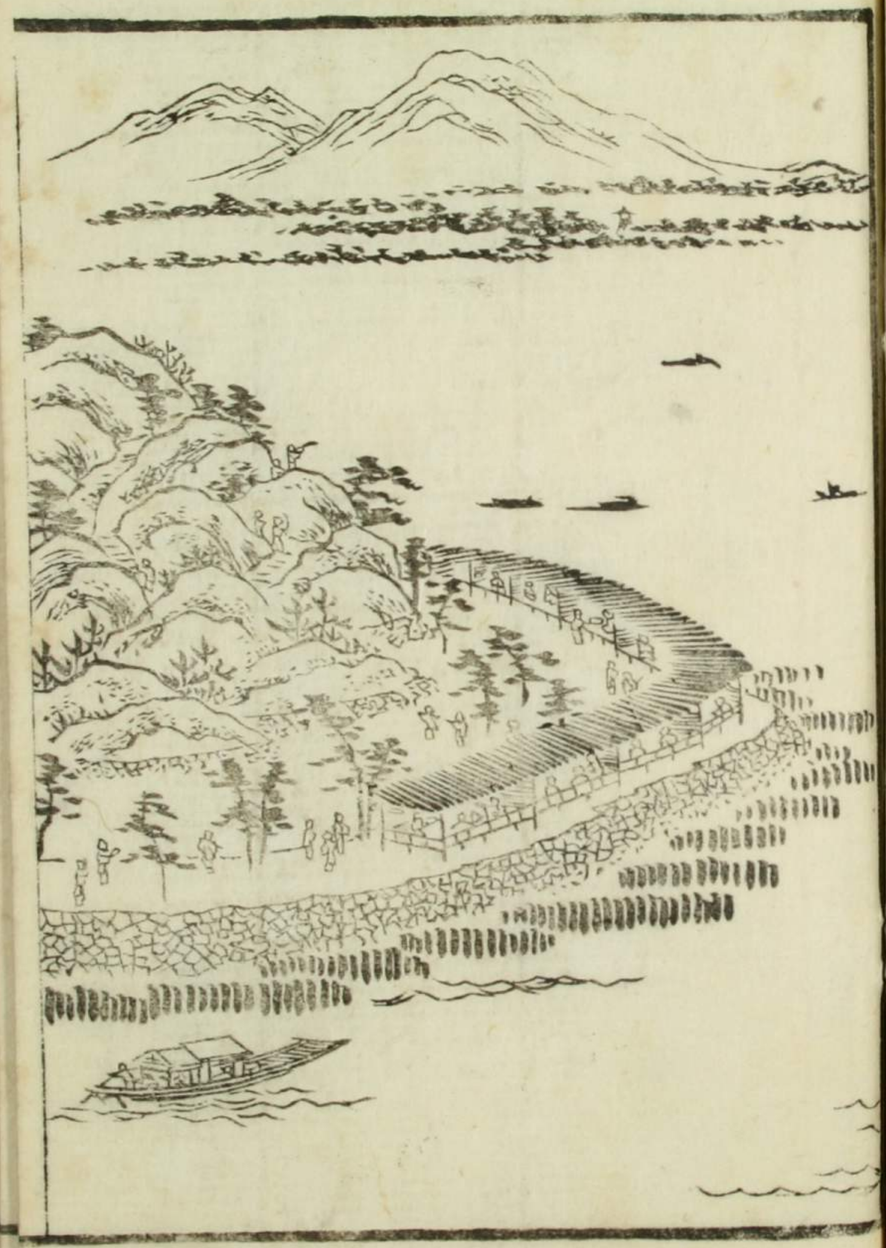
天保山ノ地形
自然亀甲ノ形ノ如シ
東ヲ頭トシ西ヲ尾トス
是所謂亀ハ陰ニ背キ
陽ニ向フト云ヘル利ニ属ヘリ

列子云渤海之東不知幾億万里有大壑焉實惟
無底之谷其下無底名曰歸墟八紘九野之水天
漢之流莫不注之而無増無減焉其中有五山焉
一曰岱輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛洲五曰蓬
萊其山高下周旋三万里其頂平處九千里山之
中間相去七万里以爲隣居焉其上臺觀皆金玉
其上禽獸皆純縞珠玕之樹皆鬱生華實皆有滋
味食之皆不老不死所居之人皆仙聖之種中畧
使巨鼇十五舉首而載之云々

○續哥林良材云かめ山といふ蓬萊の山のことなり。其山八亀の
甲の上にのせる故也云々

○圖をもつて天保山の地形自然亀甲に相似たりされば衆人彼
亀の甲の載る蓬萊の山に比せるも可あらん

○且亦此地開港の以前巨亀一疋此浦に来つて退潮里民共
と愛し近辺の叶池に書ひて養ひ育つる
月と云て數多出る諸人是を吉瑞として敬ひ祭
ぶ程なく此の地ひらけ繁栄の地となり今く以前吉
あらんと土人の語りぬ



山人の
ふるさと
磯の
佐道

○尚此地の中流に架せる橋と亀甲の形に表し各六角につくり
亀甲橋と号く是又一箇の奇とせべし。其上往還并一の橋を
萬年橋と号くるも自ら亀に倚る縁言とつふべし。
○按日本紀天智帝九年邑中亀背書申字上黄
下玄長六寸許云
○元明帝和銅八年獻霊亀長七寸闊六寸。左眼
白右眼赤頸著三台背負七星前脚有離卦後
脚有一爻腹下赤白兩點相次八字
○聖武皇帝天平元年獻異亀背 天王貴平知百年
とつゝ文字いり
○光仁帝宝亀正親町院の元亀に年号共に両頭の亀を
獻るゝ様る其余史に載るゝ霊異の亀亦多し
○清和帝貞観十七年肥後国より白亀を獻ず
○稱光帝應永廿七年河州より緑毛の亀を獻ず
右何れも神代の祥瑞
時珎本艸云亀頭ハ蛇と同ド故に字に上ハ它に従ひ其下ハ甲足
尾の形に象る它ハ古の蛇の字也甲蟲三百六十而神亀之
ど長り。其象三 離に象どり其神三 坎にいり上降して

文は天に法り。下平にして理は地に法る。
陰は背を陽に負ひ中畧
○則ち天保山の地形亀甲の形を頂と東に尾と西にす
と全く此利に属へ
○又曰秋冬は究に蔵を導き春夏は蟄を出く甲を探て放
に霊にして寿る。軽くこれを殺べ亀老すれば
則ち神は上に云へ
○秦の地に老亀あり極めて大にして寿し其大にして十とべく者を
霊亀と曰年百歳にして能変化する者を筮亀と曰とそ

天保山名器蓬莱形畧圖

或神家好一名天保亀ト云

天保亀といへる事は
てんぽうやまを例に
山城にとる寸
莫代の亀

○熨斗鎮 文鎮
菓子器ホ之
奇品也
諸君之需庶幾

中院前大納言通古卿御男

宣山

鹿之家眞萩謹製

柳は山は四時よりも其眺望絶景にして殊に嶮岨は憂苦を
忘れ饗食饌勧盃を匱しうして萬端を意に任せられぬ世を
恥なく花を折び月をうそむき雪と愛るべ実蓮葉の仙
境を乞く長生不老は寿とたりち老顔変じて実の年は
ゆくるる心地をべし
因標をもてぞ難度はしらぬ舟の蓮葉は一幹亭亦連
亀が脊を負て山をうかべる浦のゆるぎぬ世代の標めえ豊臣時成
一時の栄花を世代と知よりも実万代の亀の脊の山 浪許春成
築ぶらに亀はいくらも亀の脊を負ひしる蓮葉は山 因実蛇足

若むして栄花の来は栄代の亀はいくらもよりて山 出景春樹
仙人も来てや拾ひむ名しらぬ蓮が脊をうかべる武因英之
栄代の因標山はをぐさへ実この亀はいくらもいらう 長 永
難度はいかぶ蓮ぶしは成ふりとそれ栄ふとしる 義不識風
今よりは金ぶも手ぶ世を亀はいくらもいる山 山る伝進
因ぶるしは雲やぶ須弥の巻 響空
山乃表幾日こぶ波乃 蓬半
懐ぶ手ぶ海と山 洗山
一世栄乃とのとこ 芦秋

恰の浜　獵の淀　秋浦

あやし海やそこらかるもの　貞瑞

雑戸の蓮ぶしまやそぐ日の出　其雄

浪華御土産物雅器畧目　心齋橋通博勞町　鹿之家眞萩製

浪速名所

一之洲

澪標之圖

水尾木　又水尾串トモ云

○世俗鯖の尾ト云又ハ一番乃捧木ト云

右澪標の古木と以て作る所の雅器品々左に記し

○短冊懸　○枝折　○香合　○文狹　○菓子盆　○揚枝

○手代板　尚此余追々雅器製作仕り御用ひ被ひ希ひ

○住吉神社御祭具御折敷之摹　大小種〻有之
同　神酒土器之摸　同瓮　同津久手
同　名樹松葉冊御短冊懸
○高津宮舊趾之古瓦摹縮　是い凉炉れ臺うとに よろしき品なり
○芦分舟形御菓子器　一名一葉盆
○芦月盆　右ニ同ド
○十萬堂來山翁遺品女人形之摹　女人形の記澄たりのれ
○天保山名器蓬萊形　熨斗鎮　文鎮　置品
同　御菓子器　右いづれも來由書のもとくれ添

古雅珍器摹製畧目

南都東大寺御寶器

瑪瑙石盤摹　研屏　文鎮
鴟尾　凉爐臺
水瓶形瓶子　鴨毛屏風古紋裱褙
蘭奢待紅塵香全圖之團扇
同　縮紙製煙草袋
古製銅斗摹縮　菓子器
和琴柱形懸鍾　高燈臺摸
紅牙尺摹　懷中尺　枝折

和州法隆寺所藏

常州鹿島神社藏
鸚鵡形裱揮　御毛代古紋之摹
甲冑之摹縮置品

江州築摩神社祭具
土堝之摹縮菓子器

河州渚村土中所出
古鈴之摹風鎮　紫銅焼物　両種あり

城州深草瑞光寺藏
元政所持凉爐之摹

同　團扇　傳記のまゝ相添

隱州國造家所傳
驛路鈴摹　熨斗鎮　置物
煎茶壺　菓子器　香爐　風鎮

城州賀茂神社祭具
飯盤　土器　籠笥ホの摹

和州春日神社祭器
黑木棚摹　神供櫃形菓子器

同　所傳
古製研筥

城州畑枝村調進
燒鹽壺　蜜柑壺　土器品〻
相生扇　相生の松を作る扇子〻〻〻御祝ひの時進物又よろ〻〻品〻

播州高砂名樹之古木

紀州熊野新宮神宴
鎌之寫　十七品あり其一あり端午御かざりあり

河州觀心寺所藏
御墨溜摹縮　盃臺ぐたまろ〻

上野國新田家所藏
源義家朝臣旗之摹縮懸板

鎮西八郎爲朝所傳
大鏃之摹　端午御飾物又い疱瘡之御祝ホまろ〻

尚此余追〻新製仕れ御用之程奉希上ル

古製箭立形小研匣　康平年間折烏帽子形熨斗鎮

古昔形火燧　仝嚢　古形蕨扨　古名まりト云　御手水扨

御玄猪臼形小燭　冠形置物　のゝおきへホとよろゝ

古製夾算　いまゝへの技折　歌袋　新古両様あり

神獸騰黃之圖　悪魔邪鬼を除るの霊図あり

御神事祭器土錢形風鎮　仝瓶子　大小有之

御障子縁軟錦形彩紙　ほつゝとふすゆホふちぢりよ　よろゝを席あり

御織紋色目重錦熨斗　近日出來

尚此余畧之

五節句御飾器並四時風流御飾雅器畧目

初春

卯杖　卯槌　若菜臺　毬打　部里〳〵

破魔弓　胡鬼板　粥杖　熨斗臺

屠蘇器　屠蘇土器

懸想文賣土偶　國栖翁歌笛奏土偶

相生土偶　高砂住の江の土偶　初春年中の御祝いとよろゝき置物

上巳

雛飾調度品〻　同有職本形品種〻有之

立雛形土偶置物

端午

菖蒲飾古物摹軍器種〻

續命縷

七夕　花扇形短冊懸　并　梶の葉摺彩紙

重陽　茱萸嚢　菊壽盤　賀茂形虫籠

夏日の花風鈴　秋夕の燈篭小種々

初冬御玄猪臼　并　折敷　火桶　火櫃　手焙類

諸祝儀御進物旅行御餞別品畧目

御平産　小松臺　相生扇

御髮置　白髮綿　飾白髮苧

御初袴着　袴臺　飾刀　柏扇

御被初　檜扇

御元服　烏帽子形熨斗鎮　冠形熨斗鎮

御誓禮　本形飾鉄漿筆　妹背臺菓子器

御厄祝　雀龜菓子器　相生土偶

御年賀　高砂名樹古木製相生扇

厄除土偶

沈瀧盃　鳩杖頭　龜形菓子器

蓬莱形熨斗鎮　同菓子器

尚此余種々有之

全　風流酒おかしき
こしさげのはさみぐさにて此他行のせ門さゝげた水のみ亦相かなりくく清きしるし

全　夕顔がしき
扇の形をなし此中のたくさんしたまで花見提山のほとしさまに風流のしるしなり

全　千代の海
竹にてつくりしもので此懐中にされゆりかろくしるく風ありしあるしなり

全　葉盤紙　十葉一組
此神事用のひしその形をうつせし帋なりまりすだれ菓子などもつくせしなよろし

全　青摺紙　十葉一組
おもどころもいも少しとうつせし紙にて色帋なとさくのうらに用ひあひくよろしきもの

全　色目重御封袋　四季雑　都合　十五品一組
右ハ何れも有職の色目がさねによりてうるはしく彩色をもりたせしものなり

全　風流みつし杖
物を案じ又睡とめすほどのあれ扇の頭にあてておとがひをのせるほとなる杖にして常は携りけに用時は帯にさしたる品也

全　御名牘匣
此式日に用ひあひてのしるしさる名ふだ入れ

全　御懸物板
横がけものゝかいは色帋かけ短冊かけ扇子かけなどの短くして床の間のかけもの釘にかけられ付て上りすだれからかみなどにもさせる此板を此用ひなされば上りさがりをも自由なるべしいたりてよろしきしなゝり

尚此余懐紙。色紙。短冊。扇子ホの懸板。古今の本形。風流の御好形。色々且亦。机。文臺。文庫。研匣。色帋短冊筥。文筥。筆筥。文挟。枝折。讀軸。菓子器之類。行器。折櫃。折敷之類。臺物。棚物。盤の類。色々有之ゆへども数多なしく記しがたきを以て畧之

帝畿
御用
有職雲上形御手調度類
其品許多ある中へ器物の名目ハ畧之

無病息才　御腹袋　平生保養　御鼻袋
良方清眼　御目磨　隔病除　樵御箸
他行重宝　御懐中糊　下戸重宝　猩々散
南都名産　元禄時　鬼味噌　同　小男鹿田麸
同　古名産　法論味噌　新製無類　紅味噌
極品精造　紫蘇味噌　精品極製　李味噌
長生不老　千歳味噌　佳品製造　紅葉味噌

心齋橋通博労町北入西側
鹿廼家眞萩明啓

編述　浪速　鷄鳴舍曉鐘成
畫圖
淨書　同　松柏亭森英三
彫刻　同　市田治郎兵衛

浪華　曉鐘成編　並畫圖

天保山名産圖會　全部二冊

嗣出

攝都雅店

浪華 曉鐘成編並畫圖

天保山名所圖會拾遺 追刻

全部二冊

此篇ハ天保山乃名物名産の圖とゆゑ繁昌の商賈茶店の形勢青樓料理屋の座敷庭前ハ光景等と委〻く画き尚前編ゑ洩るる諸君ゑの詩哥連俳狂哥狂文ホ及び面〻ろ〻ゆゑ説話と加へ

右ゑ漏るゝ篇ゑ洩るるハ拾遺ゑ[illegible]紀ハ諸君ゑ[illegible]

ゑおのゝい此所まで御指出ゝ[illegible]

大阪心斎橋通博労町　鹿廼家

天保六未年六月御免

京三条通　吉野屋仁兵衛
江戸南伝馬町　中村屋幸蔵
名古屋本町　松屋善兵衛
大阪心斎橋通　河内屋喜兵衛
〃　河内屋太助
〃　塩屋治兵衛
〃　塩屋喜助

浚行書肆